受賞者の声

電子情報通信学会に関連する賞を受賞された方を御紹介します.

平成21年度　基礎・境界ソサイエティ表彰

平成21年度は，特別功労賞1名,功労賞4名,功労感謝状11名の合計16名が表彰されました.
特別功労賞と功労賞を受けられた方を御紹介します.

髙窪　　統　（特別功労賞）：電子回路設計の優れた研究とソサイエティ活性化への著しい貢献
遠藤　哲郎　（功　労　賞）：NOLTA2008 General Co-Chairとしての貢献
葛　　崎偉　（功　労　賞）：ITC-CSCC2008 General Chairとしての貢献
牧野　光則　（功　労　賞）：ITC-CSCCに対する長年の貢献
若林　一敏　（功　労　賞）：ASP-DAC2009 General Chairとしての貢献
稲葉　宏幸　（功労感謝状）：英文論文誌編集委員として，多大かつ迅速な編集作業に対する功績
鎌部　　浩　（功労感謝状）：Fundamentals Review編集活動への多大な貢献
川村　　新　（功労感謝状）：信号処理関連の研究会，集会，国際会議等の運営に対する貢献
武内　良典　（功労感謝状）：英文論文誌編集委員として，多大かつ迅速な編集作業に対する功績
名嘉村盛和　（功労感謝状）：第21回軽井沢ワークショップ実行委員長としての貢献
中村　祐一　（功労感謝状）：全国大会企画（回路とシステム）でのソサイエティ活性化への貢献
南葉　宗弘　（功労感謝状）：英文論文誌編集委員として，多大かつ迅速な編集作業に対する功績
松井　　充　（功労感謝状）：英文論文誌編集委員として，多大かつ迅速な編集作業に対する功績
宮嶋　照行　（功労感謝状）：英文論文誌編集委員として，多大かつ迅速な編集作業に対する功績
宮本　俊幸　（功労感謝状）：CSTソリューションコンペティションの実施運営・審査への貢献
山口　真悟　（功労感謝状）：CSTソリューションコンペティションの実施運営・審査への貢献

髙窪　統（特別功労賞）

「電子回路設計の優れた研究とソサイエティ活性化への著しい貢献」

紹介文：牧野光則（中央大学）

髙窪統先生は同じ大学に勤務する同僚として，また，1歳上の先輩として親しく接して頂いた．アナログ電子回路設計・解析を御専門とされた髙窪先生との本会での接点は，回路とシステム研究会をはじめとする基礎・境界ソサイエティの諸活動であった．髙窪先生は1997～1998年度に回路とシステム研究専門委員会幹事補佐，1998～1999年度に幹事を務められ，幹事退任後2003年度からは専門委員として務められた．牧野の幹事・専門委員等の在職期間を合わせると，2人で1995年から現在に至

るまで同研究会に関与を続けている．やや専門が拡散気味の自分に対し，髙窪先生は回路とシステム研究専門委員会の本流であり，研究会の更なる発展への御関与への強い期待が周囲より寄せられていた．本会の共催行事となったISCAS2004でも実行委員会の一員として御活躍された．

基礎・境界ソサイエティに関しては，1998年度からの４年間，髙窪先生は英文論文誌Ａ編集委員を務められた．投稿論文に対して的確な意見を述べることができる査読委員を選定し，査読意見をもとにして採否を決定する権限のある英文論文誌編集委員には，公平公正な観点と，当該学術・技術分野の発展を見通す識見が求められる．髙窪先生は見事にこの役目を務められた．また，同時期の1999～2000年度に務められた基礎・境界ソサイエティ会計幹事ではソサイエティの独立採算化並びに活性化へ向けて取り組まれ，御自身の学術研究とは直接には関係しないソサイエティ運営の一翼を担われた．加えて，本ファンダムレビューに移行する直前の時期である2004年度からの２年間にソサイエティ誌担当幹事を務められた．

髙窪先生の研究上の御業績としては，2000年度の本会論文賞を受賞されるなど，揺るぎない．微細化・高集積化が進む電子回路製造分野において，アナログ電子回路設計・解析を中心とする先生の御業績の重要性について認知度が今後も深まるであろう．

今回の髙窪先生への特別功労賞授賞にあたり，常に穏やかにお話しになり，真摯に研究に打ち込んでおられ，かつ，献身的に本会活動に尽くされた先生が，本会並びに大学の将来をどのように思われていたかを考えつつ，先生の御冥福を改めてお祈りし，御紹介の文を終えさせて頂くこととする．

遠藤　哲郎（功労賞）

「NOLTA2008 General Co-Chairとしての貢献」

Q．会議（NOLTA08）の準備・開催を通じて，特に印象に残っている点をお聞かせください．

NOLTA08は2008年９月７日から10日にかけて，ハンガリー，ブダペスト市のヘリアホテル（Danubius Health Spa Resort Helia）で開催された．このホテルはドナウ川に面した温泉（プールのようなもの）付のしゃれたホテルであった．会議の参加者は約200名であった．事前に2008年の１月に神野先生（当時，関東学院大学）と私の２人で打合せに行き，ハンガリー側のGeneral Co-ChairのProfessor Kolumban（ブダペスト工科大学）と代理業者のMr. Toth Gaborといろいろ打ち合わせた．当初，ハンガリーは日本に比べて物価は安いだろうとの期待があったが，実際には観光客の利用するホテルやレストランは別で会場費も意外と高く，参加費を400ユーロ以上にせざる得なくなった．これは当時のレートで計算すると７万円近く，日本からの参加者にはかなりの負担となることが予想された．また一方，ハンガリーの給与水準は平均して日本より大分低く，ハンガリー側の参加者に，この金額を負担してもらうことが果たして可能なのかどうかも懸念材料であった．しかし，参加募集を始めてみるとブダペストは特に日本人には人気があるらしく，またヨーロッパ諸国からの参加者の結構あり，全体で200名近い参加者を確保でき，ほっとした．

会場のヘリアホテルです．

ホテルの裏のボート乗り場です．
このボートでドナウ川の観光ができます．

Q．会議開催に当たって，ご苦労された点をお聞かせください．

ハンガリー側の準備状況が日本側にあまり伝わってこなくて，果たして，これで国際会議がうまく運営できるのか，やきもきしたこともあったが，実際，行ってみたら割合ちゃんとやってくれてあってほっとしたこともあった．

General Co-Chair：遠藤（明治大学）

会場の風景

レジスレーションデスク風景（左の男性がGeneral Co-Chairのコロンバン先生）

ドナウ川上のボートより王宮を望む

Q．会議中のイベント〔バンケットや催し物やツアーなど〕があればお聞かせ下さい．

バンケットは，元ワインの倉庫を使ったレストランで行われ，さまざまな種類のワインを楽しめ，皆満足のようであった．また，舞台では音楽に合わせて男女のダンスがあり，ノルタ参加者でこのダンスに参加した人もいた．また，バンケットの間に，ノルタの創設者の一人であり，ほぼ毎回参加・発表されている早稲田大学名誉教授の堀内先生の80歳の誕生日のお祝いを行った．そのほか，ホテルの裏から観光ボートでドナウ川を観光できるなどいろいろ楽しめるロケーションであった．また，ホテルから3,4駅メトロに乗ればブダペストの中心部に行くことができ，その付近にはさまざまな観光名所がある．
また，フェアウエルパーティが企画されていたが，直前にホテルに爆弾を仕掛けたとの電話が入り，全員ホテルから退出して前庭にて待機していたが，結局いたずら電話であった．このため，残念ながらフェアウエルパーティはお流れになってしまった．

Q．会議がカバーする研究分野について一言お願いします．

ノルタはもともと電子情報通信学会の非線形問題研究専門委員会と回路とシステム研究専門委員会のメンバーが中心となって作った非線形問題についての学際的な国際研究集会である．したがって，電気関係に限らず，数理関係，生体関係，経済学関係，その他，多少とも非線形に関係をつけられることであれば，あるいは，面白そうなことであれば非線形に関係なくても歓迎する．

ボード内のオペレッタレビューの美女

バンケットの演奏

堀内先生（早大名誉教授）の80歳のお祝い

向かって左は香田先生（九州大），右はコロンバン先生（General Co Chair）

堀尾先生（Technical Program Co Chair）の乾杯のあいさつ

ノルタの参加者と一緒になって踊ります．

葛　崎偉（功労賞）

「ITC-CSCC2008 General Chairとしての貢献」

Q．会議（ITC-CSCC2008）の準備・開催を通して，特に印象に残っている点をお聞かせ下さい．

ITC-CSCC2008は，2004年の仙台以来，4年ぶりの日本での開催でした．過去のデータ調査や事後処理作業などを含め丸二年間かかりましたが，その間，現地実行委員会の皆さんが論文の募集や助成金集めから会場の選定，会議の運営，また翌年ITC-CSCC2009での論文賞授与式の準備・実施に至るまで，様々な作業を始終懸命にこなしてきました．皆さんの献身的な働きぶりには本当に頭が下がります．そして，ITC-CSCC2008の開催のために，基礎・境界ソサイエティをはじめ，山口大学や地元である下関市，また通訳等のボランティアとして会議の運営に加わって下さった梅光学院大学の学生の皆様など，多くの組織や団体から心の温まる御支援を頂きました．このような強力なバックアップがあったからこそ，ITC-CSCC2008は日本での開催として最大規模のITC-CSCC会議に導かれたと思います．

Q．会議開催にあたって，御苦労された点をお聞かせ下さい．

海外からの参加者や若い学生が参加しやすいように，一般参加費は4万円，学生参加費はその半額に抑えるようにしました．当初は予算不足を憂慮し，助成金などを集めることや，関係機関への会場施設利用料一部免除の申請等に，時間を費やしました．また，予想以上に投稿論文が集まり，論文査読やプログラム編成等の作業に手間がかかり，うれしい悲鳴をあげました．

スタッフ全員

ミニコンサート

バンケット会場の雰囲気

リセプションの様子

Q．会議中のイベント（バンケットの催し物やツアーなど）があればお聞かせ下さい．

参加者に下関でのITC-CSCCを楽しんで頂けるように，バンケットの催し物として，地元の伝統芸能である先帝祭上臈参拝の風景を再現した「上臈道中」と，声楽専門で海外での受賞歴も持つ山口大学教員によるソプラノリサイタルの「ミニコンサート」を企画しました．また，会議参加者全員に，関門海峡が一望できる海峡ゆめタワー展望室のフリーパス付き入場サービスを提供しました．研究交流の合間に，飽きない関門海峡の景色も満喫して頂けたかと思います．

海峡メッセ下関

Q．会議がカバーする研究分野について一言お願いします．

ITC-CSCCは回路とシステム，コンピュータと通信などの幅広い分野をカバーする国際会議です．今年のITC-CSCC2010はタイのPattayaで開催される予定で，25回目になります．多分野を横断する研究交流ができるといった長年の伝統を継承しつつも，今後更に新たな先端的融合領域が開拓されることを期待したいと思います．

実行委員

梅光学院大学の学生

上臈道中

牧野　光則（功労賞）

「ITC-CSCCに対する長年の貢献」

今回の功労賞受賞にあたり，御推薦頂いた方々，並びにITC-CSCCを支えて頂いている方々にこの場を借りて深く感謝する．自分の功労賞受賞は，他の方々の受賞理由とは少し異なり，「長年の」という言葉が付されている．本年第25回目と四半世紀の歴史をもつITC-CSCC（International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications, 当初はJTC-CAS: Joint Technical Conference on Circuits and Systems，その後JTC-CSCC: Joint Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communicationsを経て現在の名称）に「幹事」としてのかかわりは少なくとも1998年4月から10年以上に及んだ．ITC-CSCCは大韓電子工学会（IEEK）と本会回路とシステム研究専門委員会（IEICE-CAS）の方々の合意によりスタートした国際会議（本会の規定上は学術研究集会）であったため，当初はIEICE-CASの幹事が日本側取りまとめを担当していたようである（当初の軽井沢ワークショップと同じ）．その後のソサイエティ・サブソサイエティ制への移行に伴い，IEICE-CAS関連の学術研究集会からシステムと信号処理サブソ関連の学術研究集会に移行した．引き継ぎの意味もあったのであろう，当時IEICE-CASの幹事だった牧野は移行を立案・決定された方々の御指名もあって学術研究集会の幹事に就いた．それ以降，学術研究集会の委員長が交代され，会議運営に多大なる御協力を頂いた関連研究専門委員会の方々が入れ替わりされてもなぜか幹事は交代にならず，異例の10年超の同一ポジションに至った．

その間，JointからInternationalに変更した会議名称に会議内容も合わせて順調に発展し，

東アジア・東南アジアから多くの参加者，特に若手を集めていることは正直ほっとしている．当初は本会英文論文誌にて小特集号を企画することで本会議の発展の側面支援を頂いていたが，本会議の国際会議としての独り立ちを明確にすることと，特定の国際会議を優遇する時代ではないという本会論文誌の公平公正の方針により，これからは国際会議自身としての魅力をどう向上させるかを関係者は検討する必要がある．小特集企画を継続しないことを決めたとき，自分は英文論文誌編集副幹事でもあった．自分が深く関与した国際会議に対してある意味で厳しい決断をしなければならなかったが，これが長年携わった人間の責任だと思っている．

最近の業績評価の厳格化に伴い，「格」の高い国際会議への投稿・発表を指向せざるを得ない風潮が少なからず本会会員にもあることは間違いない．しかし，国際会議に限らず，他者の作った土俵で勝負を挑むだけでなく，自ら土俵を作り，維持発展させる努力を忘れてしまえば，学会としての基本姿勢が本会から失われるのではと懸念する．間もなく退任する和文論文誌編集委員長としてもこのことは強く思う．若手の諸氏（自分は40代半ばであるからまだ若手の端に入れてもらえるか?）には，本会を活用して新たな場の設立・発展にも志の一部を振り向けてほしい．

General Co-Chair を務めた ITC-CSCC2006 にて